

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 17 日現在

機関番号：13301

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2016

課題番号：26590256

研究課題名(和文)高機能自閉症スペクトラム障害児への支援：会話分析から単一事例実験デザインへ

研究課題名(英文) Supporting children with HFASD: From conversational analysis to single subject research design

研究代表者

大井 学(Oi, Manabu)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号：70116911

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：5事例について会話分析と介入が行われた。大人の話している最中に無関係な行動を始めるケースでは大人の大げさな身振りで改善がもたらされ、前置きなしで話す子どもに大人が直截な質問をすることで会話の継続につながった。大人の終助詞付きコメントに子どもが反応しないケースでは終止形をもちいてコメントするようにし、子どもの反応が得られるようになった。子どもと大人がセッション終了の合意を生み出すことができなかったケースでは、大人があからさまでメッセージを詳述する長い言葉を用いると交渉が可能となった。

研究成果の概要(英文)：Five boys with high-functioning autism spectrum disorder was interviewed to their communicative failure by conducting conversational analysis. In the case where the boy began irrelevant behavior while the adult talked, conversation was improved when the adult used flowery gestures. In the case where the boy talked without preamble, the conversation was sustained by the adult's straight questions to the boy. In the case where the boy did not respond to the adult's comment with sentence end particle like "no", the boy responded to the adult's comment with end-form sentence. In the case where the boy and the adult failed to negotiate on ending the session, the negotiation was possible when the adult talked with longer sentence which described the message in detail.

研究分野：特別支援教育

キーワード：自閉症 会話分析 単一事例実験デザイン

1. 研究開始当初の背景

高機能自閉症スペクトラム障害にともなう語用論の障害は非常に広範で多岐にわたる(大井, 2006)。20組の大人と子どもの会話を分析した結果示されたのは、1)15種類の語用障害がみられ、2)それを大人が補償する方略が6つあるというものであった(Oi, 2005)。語用障害が多様であるのに比べ、補償方略は限定されていると予想された。一方、高機能自閉症スペクトラム障害にともなう語用障害に対する介入研究方法として単一事例実験デザインがあるが、これを会話分析と結びつけた試みはこれまでなかった。

2. 研究の目的

高機能自閉症スペクトラム障害にともなう語用障害を会話分析で把握し、それを補償する方略を考案し、その方略の実施の効果を単一事例実験デザインで検証する。

3. 研究の方法

5歳から8歳の高機能自閉症スペクトラム障害児5名と、高機能自閉症スペクトラム障害についてナイーブな大人5名により、1対1の組み合わせで5組を構成する。各組は5回のベースライン、5回の介入(会話分析と補償方略の提案)5回のウィズドローアルの合計15セッション(一回1時間)の会話機会を持つ。会話分析は各大人が作成した文字転写資料とビデオを照合しながら、研究代表者が実施し、それぞれの大人にフィードバックする。会話分析の焦点となったエピソード、介入を受けて大人が方略を用いたエピソードを抽出し、比較した。また、各組ごとにコーディングシステムを作成し、当該語用障害の生起頻度をセッションごとに数え、ベースライン、介入、ウィズドローアルで比較した。コーディングは研究目的を知らない大学院生が行った。

4. 研究成果

各組で焦点を当てた語用障害は1種類であった。その語用障害が現れたエピソードと、考案された方略を介入期間中に利用したエピソードを比較したところ、事例1では大人の提案に耳を傾けず、大人が話している最中に無関係な行動を始めていた。大人は大きな身振りをを用いることで子どもの注意を獲得することができた。事例2では、子どもと大人の会話が行き違い、話がまとまらないことがみられた。子どもは前置きなしに話を始め、大人は子どもの前提がわからず含意を生み出すことができなかった。これに対して、大人が子どもに直截な質問をすることで行き違いが修復された。事例3では子どもと大人とがセッションの終了の合意形成のための交渉が生じなかった。大人は可能な限りあらゆるさまにかつ詳しく終了について提案するように求められ、それによって終了の交渉が成立した。事例4では、大人の終助詞付きコメント、形容動詞の未然形のコメントに対し子どもからの反応がなかった。大人に対しては終止形を用いて話すことが提案され、こ

れにより子どもが大人のコメントに反応した。事例5では、大人からの疑問詞質問に対し子どもが無反応であった。大人に対し「はい・いいえ質問」に切り替えるよう提案され、これによって子どもが反応するようになった。

上記の会話分析の概容は次の通りであった。まず事例1A君、6歳である。慣れないソーシャルワーカーの女性と遊んでいた。

1)大人：両手を首と顎の境目あたりで掌を横に繋げて上下させながら「A君、こっから上に投げるの止めようか？」

2)A：「投げた」ブロックを追い、大人の言葉の途中で走りだす「すっげー！！飛んできた！」

3)大人：動きを追いながら「ほんとだ。お顔当たるの危ないから、ルール決めるぞ！」

4)A：「うーしょ、うーしょ」片足ケンケンで飛んだブロックを集めている

5)大人：「一個だけルールを決めても良いですか？」

6)A：「うん」と言いながら視線は横。集音マイクをみつけ開けようとする

7)大人：「あ、それマイクだから、マイク開けないでね」Aの傍に行き袋から出すのを止めようとする

8)A：ブロックを握り、投げようと大人の顔をじっと見る

9)大人：首と顎の境目に両手を横に当てて、顎から下へ手を上下動かしながら「顔、だめよ。ここから下よ」Aの様子を見ながら「じゃ、1, 2, 3！」

10)A：大人の顔から視線を少し下に動かして、首から下に向かってなげ、大人の顔を見て笑いながら「逆攻撃！」

A君はなかなか大人の提案に耳を傾けない。話している最中に無関係な行動を始める。会話を協力してすすめる気がないように見える。大人は8)をすかさずチャンスとして大げさで明瞭な身振り9)をする。これでやっと提案を聞いてもらうことができた。

次は事例2B君、6歳。未知のSTとの会話である。

1)B：ジェストコースター乗ったことある？

2)大人：ある。こわかったやろー

3)B：こわくなかった

4)大人：こわくなかった？

5)B：ほして、パーキングも乗った

6)大人：ん？

7)B：パーキング

8)大人：パーキング行った？

9)B：うん

10)大人：ふーん、駐車場？

11)B：え？

12)大人：駐車場。パーキングって何？

13)B：パーキングってあの揺れるやつ

14)大人：あ、わかったバイキングか。はいはい船みたいなやつね

15)B：うん

この場面もそうだが、B君と大人の会話はしばしば行き違いが生じ、話がまとまらないことが頻繁にあった。B君は前置きなしに話し、大人にはなんのこともさっぱりわからないということがたびたびであった。大人はなかなか突っ込んだ質問や指示ができずにいたが、ここでは12)で、ためらいなく質問した結果やっと話がまとまった。

次の7歳の事例3C君は未知の大学院生とのセッションを終了する合意をつくるのがなかなかできなかった。セッションを終わるタイミングであることを大学院生がそれとなく伝えても、ほとんど無視同然であった。

1)大人：おっじゃあそろそろ時間だし片づけしますか？

2)C:(ブロックをいじったままで)んー

3)大人：ねえ

4)C:(ブロックをいじり続ける)

5)大人：ふふ(笑い)

6)C:(ブロックを飛ばそうとする)

7)大人：よっ飛ばない

8)C:(手に持っているブロックを見せながら)飛ばない半分飛んでった

9)大人:(手でちょっとのしぐさをしながら)ちょこっとちょこっと

10)C:ちょこっと飛んでった

(ブロックをいじる)

11)大人：ねえねえC君そろそろお片づけしませんか？(C君のほうを覗き込む)

12)C:(5秒間くらいブロックをさわり、パチッとさせて大人の方に見せる)

13)大人：飛ばない

14)C:(パチッとブロックを飛ばそうとする、もう一回飛ばそうとする)

15)大人：よっ。(笑い)

16)C:(投げるようにしながらブロックを飛ばす)

17)大人:(笑い)今ちょっと投げたよね。(飛ばすしぐさをしながら)(笑い)

18)C:(手元のブロックを見ながら)だっとなかなか飛ばないんだもん

19)大人：ねえー飛ばないねー

20)C:(5秒間くらいブロックをいじる)

21)大人：じゃあまた今度飛ばす研究しようかねっ(T君のほうを見る)

22)C:(大人の方を見て、自分の手元と大人のほうをちらちら交互に2回見た後、大人の方に向かってブロックを飛ばそうとする)

セッションの終了の誘いかけは1)11)

21)の3回行われたが、いずれも効果をあげなかった。それで2週間後のセッションでは、このような不発のやりとりを重ねた後、研究代表者の提案に沿って可能な限りあからさまにかつ詳しく話しかけることにした。

大人：「C君、さっきお母さんとね、あの時計が4か5くらいになったら終わりにしますって言ったんだけど、だからお姉さんはそろそろ終わらせたいんですが、Cくんはいつ終わりにしたいですか？」

C：「もうそろそろ終わらせたい。」

(以下はこの大学院生の感想である。「言葉を増やしたら、終了まではスムーズだった。でも、お母さんに終了時間を伝えていることを一番先に伝えたり、Cくんにとってはけっこうキツめに“終わりにしなければならぬ”ことが伝わってしまったかな、と感じた。本当に終わりにしたかったのなら問題は無いのだけれど、本当は終わらせたくないのに言わせたという可能性も考えられるのかな？と私自身少しひっかかった。」)物事をあるタイミングで終了することや開始することの交渉は自閉症児が相手の場合円滑にすまないことがよくある。大人の側があからさまにいうと伝わる。なかなかここまであからさまにいうのは大人にはためられるところである。

次は事例4D君7歳である。未知の特別支援学校の教師との会話である。

1)D:バイキンマンを袋から出して 床に落とす「だれんち？」

2)大人：うん？

3)D:「だれんち？」袋の口を大きくひらく

4)大人：「誰のうちやる」「バイキンマンのおうちかな」

5)D:ドキンちゃんを出す

4)の大人の終助詞付きのコメントにD君は反応していない。大人が正解をいったので満足したのか、それとも誤答だったので無視したのかもわからない。発話中の形容動詞の未然形や終助詞の利用に問題があることは日本語の自閉症児ではしばしばみられる。次のセッションでは終止形をもちいて断定的にいうことが大人に研究代表者から提案された。

1)大人：絵を指さし「これ しょくぱんトラックは バイキンマンが こわした」

2)D:絵を指さし「バイキンマンが こっちに 穴あいて」 また指さし

3)大人：「はーん バイキンマン 穴あけたんや」指さし

4)D:指さし「これが あいて」

5)大人：「うん」

6)D:「こうじょうして おうちにはいって... こっちになった」左側の絵を指さし

7)大人：右側の絵を指さし「バイキンマンが こわしたから 新しく こっちになったんや」左側の絵を指さし

8)D:左側の絵をちょっと指さし「こっちが トラック...」 右側の絵を指さし「こっちが トラック」

この後も長く話が続いていきD君と大人はおもちゃについての認識を共有することができ、無反応でD君が何を考えているかわからない、という事態は避けられた。

最後の事例5E君8歳の会話の相手は日本語も話せる北米からの女子留学生であった。彼女とE君の会話では、疑問詞質問が無反応になるケースがめだち、はい・いいえ型の質問を使うことを研究代表者から提案した。また、彼女がE君の話が誰に向けられているの

かわからないという問題も浮かび上がった。日本人の相手ではあまり起きない問題である、聞き手を特定せずに話すということは確かにE君には認められた。そのことを留学生からお母さんに帰り際伝えたところ、おうちでO先生と呼んでから話しかけるようにと助言したそうで、次のセッションではO先生と呼んで聞き手を特定していた。はい・いいえ質問は予想通り効果を上げ、疑問詞質問のように大人を無視するという事はなくなった。

これらの会話エピソード比較からコーディングシステムを構成し、1時間の会話の中央の10分間を抽出、文字転写した資料についてビデオを見ながらコーディングが行われた結果、5種類の語用障害のいずれでも、ベースライン、介入、ウィズドローアルの有意な変動が見られなかった。

会話分析は語用障害の抽出と補償方略の考案には適しており、会話の中で語用障害が改善するエピソードの抽出を可能とするが、それに基づいて、単一事例実験デザインを適用した場合、語用障害の持続的な改善につながらないといえる。これは方略の使用に失敗したのか、方略自体が有効でなかったのかの検証が必要と考えられた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

1. 大井 学 (2015) 障害のある子どもとの会話、発達、141,52-58. 査読なし

[学会発表](計 3 件)

1. Oi, M. (2016) Applying the principle of conversational analysis to the intervention in children with high-functioning autism spectrum disorders: Further study. International Clinical Linguistics & Phonetics Association, 2016.6.16. Halifax (Canada)

2. Oi, M. (2015) Applying the principle of conversational analysis to the intervention in children with high-functioning autism spectrum disorders. International Meeting for Autism Research. 2015.5.14. Salt Lake City (USA)

3. Oi, M. & Li, H. (2014) A longitudinal study of a Japanese-English-Chinese trilingual family with a HFASD child: mother's language use pattern and parents' compensatory speech. International Clinical Linguistics & Phonetics association. 2014.6.12. Stockholm (Sweden)

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大井 学(OOI, Manabu)

金沢大学・学校教育系・教授

研究者番号: 70116911